

第2章 史跡の概要

2 - 1 . 史跡指定の概要

(1) 当初指定

史跡の当初指定は昭和6(1931)年3月30日付け、文部省告示第116号により行われた。概要は以下のとおりである。

所在地 福岡県糸島郡今津村大字今津字口戸、字長濱、
今宿村大字横濱字カンノン前、大字青木字松原
早良郡壱岐村大字下山門字生ノ松原
姪浜町字生ノ松原、字向濱、字脇
福岡市西新町、地行西町
糟屋郡箱崎町大字箱崎字地藏松原

指定面積 民有 31筆 5町2畝25歩2合5勺

国有 10筆 7町6畝21歩3合2勺

説明 文永11年蒙古襲来ノ後防備ノ爲博多湾一帯ニ亘リ築カレタル築地ニシテ處ニヨリ規模一様ナラズ幅10尺高さ7、8尺に及ベリ

(2) 第1回追加指定

昭和56(1981)年3月16日付け、文部省告示第36号により第1回目の追加指定が行われた。

所在地 福岡県福岡市西区今津字長濱

指定面積 26,722 m²

説明 史跡元寇防塁は、文永11(1274)年の蒙古襲来の後、時の執権北条時宗が、建治2(1276)年博多湾一帯にわたって、九州の御家人に命じて構築させた石築地で、指定の地域は11ヶ所に及ぶ。このうち今津地区においては、毘沙門山と柑子岳の間を結ぶように構築された防塁の大部分は、史跡に指定されている。この両山間の毘沙門山寄りの防塁に接する海側及び内陸側の若干の部分の防塁を追加指定する。

(3) 第2回追加指定

令和2(2020)年3月10日付け、文部科学省告示第23号により、九州大学箱崎キャンパス跡地南側で確認された元寇防塁について追加指定が行われた。

所在地 福岡県福岡市東区箱崎6丁目3330番5

指定面積 4,504.97 m² (3330番5のうち実測)

説明 文永11年(1274)のモンゴル襲来後、執権北条時宗が、建治2年(1276)に博多湾一帯にわたり、九州の御家人に命じて構築させた石築地。今回、九州大学箱崎キャンパス跡地で新たに発見された部分を、石築地跡に隣接した溝状遺構を含めて追加指定する。

(4) 第 3 回追加指定

続いて、令和 3 (2021) 年 10 月 11 日付け、文部科学省告示第 169 号により、九州大学箱崎キャンパス跡地北側で確認された元寇防塁について追加指定が行われた。

所在地 福岡県福岡市東区箱崎 6 丁目 3330 番 3

指定面積 887.7 m² (3330 番 3 のうち実測)

説明 文永 11 年 (1274) のモンゴル襲来後、執権北条時宗が建治 2 年 (1276) に博多湾一帯にわたり、九州の御家人に命じて構築させた石築地。今回、九州大学箱崎キャンパス跡地で新たに発見された部分を、石築地跡に隣接した溝状遺構を含めて追加指定する。

(5) 史跡指定の現状

これまでの史跡指定により、指定地は市内 11 地区、指定面積は 148,766.81 m²となっている。

各地区は以下の通り

福岡市西区	今津 4806 番、4807 番他	(今津地区：指定面積 81,627.3 m ²)
	横浜 2 丁目 1582 番他	(今宿横浜地区：指定面積 746.23 m ²)
	今宿駅前 1 丁目 1120 番 158 他	(今宿青木地区：指定面積 5,441 m ²)
	生の松原 1 丁目 1219 番 1 他・小戸 5 丁目 1752 番 2	(生の松原地区：指定面積 42,789 m ²)
	小戸 3 丁目 1862 番 4	(姪浜向浜地区：指定面積 563 m ²)
	小戸 1 丁目 2407 番 7 他	(姪浜脇地区：4,702 m ²)
早良区	百道 1 丁目 807 番 217	(百道地区：指定面積 2,634 m ²)
	西新 7 丁目 798 番 32 他	(西新地区：指定面積 2,479 m ²)
	地行 2 丁目 12 番 19	(地行地区：指定面積 155 m ²)
東区	箱崎 6 丁目 3330 番 3、3330 番 5	(箱崎地区：指定面積 5,392.67 m ²)
	箱崎 6 丁目 3575 番 12、筥松 4 丁目 3575 番 54	(地蔵松原地区：指定面積 2,237.61 m ²)

2 - 2 . 歴史的価値

本史跡の学術的調査研究によって明らかとなった本質的価値を以下の3点に整理した。

(1) 博多湾岸に築造された長大な石塁遺構等の価値

元寇防塁は文永の役(1274年)直後の、建治2(1276)年の3~8月のおよそ半年間で、博多湾沿岸の砂丘上約20kmにわたって築かれたとされ、同時代資料では「石築地」などと呼ばれている。この石築地は文永の役(1274年)において博多湾からの上陸を許した経験から、前線防衛の機能を有する施設として、九州各国の御家人の分担により築造されたものである。築造後の弘安の役(1281年)では、実際に元軍の上陸を阻止しており、その目的である防衛上の役割を十分果たしている。これだけの規模を有する一連の長大な遺構は国内には類例がなく非常に貴重である。

また、防塁築造にあたっては九州各国の御家人に対して、その所領に応じて分担が定められている。その構造には多様なバリエーションが存在し、中でも箱崎地区では防塁背面に大溝が並走するなど特異な様相を呈している。一連の構造物は当時の土木技術を知ることのできる貴重な遺構であり、文献上では石築地の築造・維持管理にあたって、「加佐」「裏加佐」「裏芝」などの語が見られ、遺構との対応も比較研究されている。

(2) 当時の東アジア情勢を雄弁に物語る歴史資産としての価値

当時の東アジア社会は急速な拡大を続けるモンゴル帝国の影響下にあり、世祖クビライによる南宋支配と海上ルートの確保を目的とした圧力が強まる中、北部九州は文永の役(1274年)、弘安の役(1281年)と2度の攻勢にさらされることになった。元寇防塁はまさにその脈絡の中で防衛上の重要施設として築造されたものであり、その存在は13世紀の東アジア情勢を如実に示す貴重な遺構である。

(3) 市民生活の中に残る記憶としての価値

元寇防塁は築造後も鎌倉幕府の命を受けた御家人によって、異国警護として継続的な維持管理が行われており、文献資料等でも14世紀前半の室町時代前期までは維持管理が行われたことが知られている。その後、対外的な脅威が過ぎ去るとともに、防塁はその唯一最大の機能である防衛上の役割を終え遺棄されることとなる。その後は江戸時代の『筑前国続風土記』にみられるように、様々な開発行為に再利用される形で多くの石材が持ち去られるとともに海岸砂丘内に埋没し、石積み遺構の姿は失われたと考えられるが、都市化による開発や海浜部の埋め立てが進む中でも貴重な歴史遺産として、市民の生活と共に残り続けてきた。

2 - 3 . 史跡における構成要素

(1) 本質的価値を構成する要素

元寇防塁の本質的価値はその防衛上の機能にあり、博多湾岸に延長 20km にわたって築造された石積み遺構およびそれに伴う土塁・溝状遺構等がその価値を示す構成要素である。

また、文献における「石築地」「加佐」「裏加佐」「裏芝」等の記載がこれらの遺構を示すものと考えられる。

(2) 本質的価値を補完する要素

本質的価値を補完する要素として、現在露出展示を行っている今津地区・生の松原地区・百道地区・西新地区における石積みの復元及び土留め施設のほか、遺構の上面を覆う保護盛土、史跡説明板、防護柵、フェンス、石製標柱、案内サイン、境界標、四阿等の保存管理及び公開活用を目的として整備された施設がある。

(3) その他の要素

その他の要素として、史跡内で防塁と共存する松林ほかの樹木、民有地及び公有地における民間所有の構造物・墓石等がある。これらは遺構の確実な保存にあたり、十分な配慮を必要とする要素である。

表 2 - 1 史跡の価値を構成する要素

要素の分類	構成要素
本質的価値を構成する要素	石積み遺構、土塁、溝状遺構
本質的価値を補完する要素	復元遺構、遺構展示土留め等施設 保護盛土 説明板 防護柵、フェンス、石製標柱、案内サイン、境界標 四阿等
その他の要素	樹木、民間所有の構造物・墓石等

2 - 4 . 調査研究および整備概要

(1) 調査研究および発掘調査の曙 (大正期 ~ 戦前)

元寇防塁における学術的な調査研究は大正時代にさかのぼり、九州帝国大学医科大学教授の中山平次郎による研究がその端緒と位置付けられる。大正 2 (1913) 年に福岡日日新聞社主催の今津地区で行われたのが 1 回目の発掘調査である。またこの報告の中で中山はその構造について検討を行うとともに、「高く砂堤を盛り、頂上に純然石より成った障壁」について、その歴史的背景から「元寇防塁」と命名し、これ以降この名称が定着することとなる。この中山の一連の研究は、防塁の構造のみならず、元寇防塁を基にした博多湾の地形変化や遺跡形成の地理学的研究にまで視野を広げている。また中山は現九州大学病院から九州大学箱崎キャンパス跡地にいたる綿密な踏査の結果、現地に残る「凸地」「墓地の土手」「隆起」などの痕跡から、この地における防塁の位置を推定している。このほか、主に大正時代には『筑紫史談』において、竹谷水城・島田寅次郎などにより防塁の構造等の研究がすすめられた。

昭和 16 (1941) 年には福岡県嘱託川上市太郎が『元寇史蹟 (地之巻) 』(福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第 14 集) により、防塁の位置や内務省考査官による実査の内容等それまでの成果についてまとめている。

これらの研究の基礎となった発掘調査も並行して行われており、大正 9 (1920) 年に教育勅語御下賜三十周年記念として西新尋常高等小学校の生徒により、現在の西新地区元寇防塁にあたる場所で発掘調査が行われた。また、同年箱崎の東側地藏松原においても防塁の一部を確認しており、ここでは後述する九州大学箱崎キャンパス跡地における調査成果同様、比較的大きな石材を海側の前面にのみ積んでいる状況が看取できる。このほか大正 10 (1921) 年には香椎浜男、姪浜町向浜、姪浜町阿隈などで調査が行われた。大正 13 (1924) 年西新では道路工事において防塁が露出し、砂と粘土による版築状の「土壇」が確認されている。また、この時期には現西南学院大学博物館の南側や修猷館高校運動場の北側 (現西南学院大学構内) に石積みが露出していたようである。

(2) 本格的調査と整備事業 (昭和 30 年代以降)

元寇防塁を対象として本格的な整備や発掘調査が行われるのは昭和 30 年代以降のことである。

昭和 32 (1957) 年には今津大原地区の道路工事の際、福岡県教育委員会により発掘調査が行われている。なお、当該地点では路面下での現状保存が図られているとのことである。また、西新地区においては、大正 9 (1920) 年の発掘地点が露出したままとなっており、石材の一部が崩落していたため、昭和 36 (1961) 年にその一部の石材を復元修理した。

その後、昭和 42 (1967) 年度以降、福岡市において元寇防塁についての計画的な整備及びそのための確認調査を行っている。

昭和 42 (1967) 年度には生の松原地区における発掘調査で行われた。これにより防塁の位置・構造・使用石材・当時の地形等についての重要な所見を得ることができた。

昭和 43 (1968) 年度には今津地区の発掘調査とともに、生の松原地区及び今津地区において地盤や石積みの安定を図るための保存整備工事を行った。

昭和 44（1969）年度は西新地区を対象として発掘調査と張芝等の整備工事を行った。

生の松原地区、今津地区、西新地区で行われたこれらの発掘調査では、詳細な検討のうえで報告が行われ、それぞれの防塁の構造・築造方法だけでなく石材の分析や地形復元など学際的に多くの成果を上げ、防塁研究が実証的に大きく進展していくこととなった。今津地区の元寇防塁の石材は東側の毘沙門山から産出される玄武岩と西側の柑子岳一帯の花崗岩が使用され、玄武岩を主として築かれた箇所ではすべて石材で構築されているのに対し、花崗岩を使用した箇所では前面と背面は石積みを行うが、内面の下部には砂を充填し、上部に石材を敷き詰めて構築している。また、防塁の高さは、基盤の砂丘が海岸側に傾斜しているため、石積み前面と背面の高さが異なるが、前面が 2.6～2.8m 残存している部分もあり、防塁の築造当初の姿を示しているものと考えられている。生の松原地区は基底面の幅は 1.5m ほどと今津地区の半分ほどである。現状の残存高は 1m 弱で防塁の背面には粘土と砂が互層となった盛土が行われている。また、防塁の前面に補強とも考えられる 1～2 段の石積みが確認された。西新地区では全面石積み下部の背面に粘土と砂の版築を行いその上面から背面の石積みを行う、丁寧な基礎地業が確認されている。

昭和 45（1970）年度には、昭和 42・43（1967・1968）年度の整備事業を参考として、露出展示の保存に関する薬剤について、福岡県福岡工業試験場において耐候試験を行った。

昭和 46（1971）年度には前年度試験結果を基にして、今津地区の露出展示部分において、薬剤の塗布と経過観察による復元補強試験を行った。

昭和 47（1972）年度は今津地区において露出展示箇所を延長し、現在の状態である延長 170m の展示とした。また、あわせて石積みが良好に確認できる箇所において、上面に保存処理を施したうえで、周囲に擬木柵を巡らせ、説明板及び注意看板を設置した。また、百道地区においても石積み上面が露出している部分について、保存処理を施したうえで、擬木柵・説明板を設置した。

昭和 49（1974）年度にはすでに整備を行い、露出展示をしていた生の松原地区において、擬木柵・説明板・注意看板の設置を行った。

昭和 50（1975）年度は前年に引き続き、生の松原地区の擬木柵の延長工事及び説明板の充実を図った。また、姪浜向浜地区においては全面に張芝を行い、擬木柵及び説明板による指定地の明示を行った

昭和 51・52（1976・1977）年度は今宿青木地区において環境整備事業を行い、張芝や擬木柵及び説明板の設置を行った。

昭和 53（1978）年度には姪浜脇地区において発掘調査を行った。また、地藏松原地区において張芝のうえ擬木柵を設置している。

昭和 54～56（1979～1981）年度には姪浜脇地区における環境整備事業として、張芝、擬木柵・説明板の設置を行った。

(3) 生の松原地区の復元整備および発掘調査による資料の蓄積 (平成)

概ね、昭和 43～56 (1968～1981) 年度までの整備事業によって、現在の公開範囲の状況が形作られており、改修を加えながら現在に至っている。この中で生の松原地区では露出展示部分において、平成 10 (1998) 年度に発掘調査を行った後、平成 11 (1999) 年度に復元整備を行った。

発掘調査は復元整備の基礎データを得るため、石積み及び背面の構造の再確認を目的として行ったものである。その結果、底面幅 1.5m、残存高 1.3m の石積み上部に 1.2m の復元を行い、高さ 2.5m 程度に仕上げた。また、石積み背面には砂と粘土の版築により通路上の盛土を行った。露出展示は長さ 100m に及び、そのうち復元行ったのは長さ 50m である。

同じ平成 10・11 (1998・1999) 年度には博多遺跡群において石積み遺構を長さ約 50m 確認したが、元寇防塁としての確証は得られていない。この調査は博多小学校建設に伴うもので、調査後校内に露出展示施設を設置・公開している。

平成 11 (1999) 年度には西南学院大学の学内整備における発掘調査によって防塁の一部が確認された。防塁の前面と背面の砂丘面上に貼った粘土層上に石積みが確認され、その間には石材が認められないことから石積みの内部には砂と粘土が充填されていたものと考えられる。また、石積みの南側に近接して粘土と砂が互層に版築された高さ 1 m の土塁が検出されている。さらに、土塁背面には 5～6m 間隔で陸橋上の突出部が認められる。土塁は防塁から石積み撤去されたものと考えられ、前面の石積みに先行するものと考えられている。この調査により防塁本体の構造だけでなく付属の構造物として背面の突出部の存在が確認されたほか、防塁の改修についても可能性を提示することができた。なお、本調査において確認された防塁については、新しく建設された校舎の内部に移築・復元のうえ、一般に公開されている。

また、平成 5 (1993) 年度と平成 12 (2000) 年度には地藏松原地区において JR 鹿児島本線の高架事業に合わせた調査が行われ、構造は不明ながら石材の散布を確認している。

平成 17 (2005) 年度に香椎地区で行われた調査地点は、大正 10 (1921) 年に調査が行われた香椎浜男地点に隣接している。この調査では石積みの基底部に胴木が設置され、その横から寛永通宝が出土することなどから防塁ではないと判断されている。

平成 27～29 (2015～2017) 年度には今津地区元寇防塁の環境整備に資するため、延長 500 m のなかで、5 か所にトレンチを設定し、防塁の構造や埋没状況および正確な位置の確認等を目的とした調査が行われた。調査の結果、防塁の構造にはすべてを石材のみで構築するもの、前面にのみ石積みを行い背面には敷石を施した斜面を付すもの、前面および背面に石積みを行い、内部には石・砂を充填するものなど、狭い範囲でバリエーションを持った構造を認めることができた。

これらの発掘調査の成果から、元寇防塁の構造等の比較研究や博多湾の旧地形に関する研究が大きく進むこととなった。

(4) 箱崎地区（九州大学箱崎キャンパス跡地）の発掘調査と成果

箱崎地区については、平成 28（2016）年度から九州大学埋蔵文化財調査室により、九州大学箱崎キャンパス跡地における発掘調査を行っている。

平成 28（2016）年度実施の HZK1603・1604 地点では、箱崎地区ではじめて海側前面の石列を検出した。石積みは最大で 3 段（高さ 0.9m ほど）が残り、石積み背面には緩斜面をもつ盛土を有する。石材には礫岩および砂岩・泥岩が使用されている。また、HZK1601 地点では防塁に関連する幅 14m、深さ 1.5m の溝状遺構が確認されている。

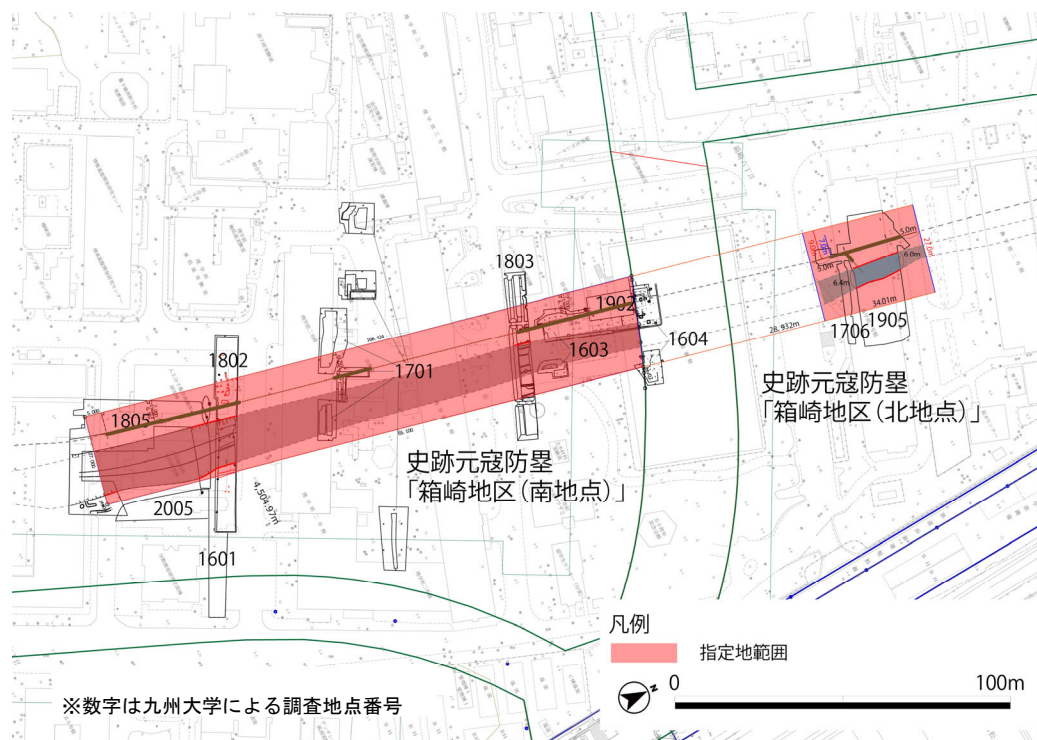


図 2－1 箱崎地区元寇防塁指定地位置図



図 2－2 箱崎地区 HZK1701 地点



図 2－3 箱崎地区 HZK1701 溝状遺構土層



図 2 - 4 箱崎地区 HZK1805 地点



図 2 - 5 箱崎地区 HZK1805 地点石積みと溝状遺構

なお、石積みの検出地点はかつて中山平次郎が推定した場所とほぼ同じである。

平成 29 (2017) 年度には HZK1701・1706 地点で石積み遺構とこの背後に並走する溝状遺構を確認した。HZK1701 地点では 12 世紀前半から 13 世紀前半の土器を含む砂州の稜線に沿って、基底部 1 段、7 石の石積みと背面に幅 11.5m 以上、深さ 0.7m の溝状遺構を検出した。溝状遺構については出土遺物から 13～15 世紀の埋没と考えられている。また、ジオスライサー調査の結果から、石積みから海側 20～39m のあたりに防塁構築時期の汀線が形成されていたことが推定された。

平成 30 (2018) 年度に元寇防塁関係の遺構が確認されたのは、HZK1802、1803、1805 地点であり、石積み遺構と背面に並走する溝状遺構を確認した。石材は砂岩及び礫岩で、石積みはほぼ基底面の 1 段のみが残存するのみである。

令和元・2 (2019・2020) 年度の調査では HZK1902・1905 で関連遺構を確認している。

HZK1902 地点では施設基礎の直下及びその南北両側から、砂岩及び礫岩による石積みが断続的に確認された。HZK1905 は箱崎キャンパス跡地内の調査で確認された石積み遺構の中では最も北側に位置する。全長 22.6m で、ほぼ 1 段の石積みを確認されている。ここでは石積み背面からこれに斜交する長さ 2m ほどの石列が認められた。調査者はこれを元寇防塁改修の痕跡ととらえている。また、石積み遺構の背面には大溝も確認している。なお、キャンパス跡地北側において確認された元寇防塁は N - 10° - E の方位を取り、既存の指定地である地藏松原地区に接続するためには、東に屈曲しているものと考えられ、その地点を確認するために HZK2001・2002 地点の調査を行ったが、関連遺構は確認できなかった。

これまでの九州大学箱崎キャンパス跡地における調査の結果、元寇防塁と考えられる石積み遺構とその背面の大溝が断続的に確認された。その位置はかつて中山平次郎が「凸地」や「隆起」などの痕跡から推定した位置におおよそ近似している。

また、発掘調査の成果として、①石積みが海側前面の一系列しか存在しない点、②石積み背面は砂層のみで構成され、粘土層や版築構造は確認できない点、③石積みの陸側に大溝が付随する点が主な特徴として指摘されている。①にみられる構造はこれまでの調査で明らかとなった他地区のものと様相を異にしており、他と比べてもその構造の脆弱性が指摘でき、箱崎地区の大きな特徴となっている。

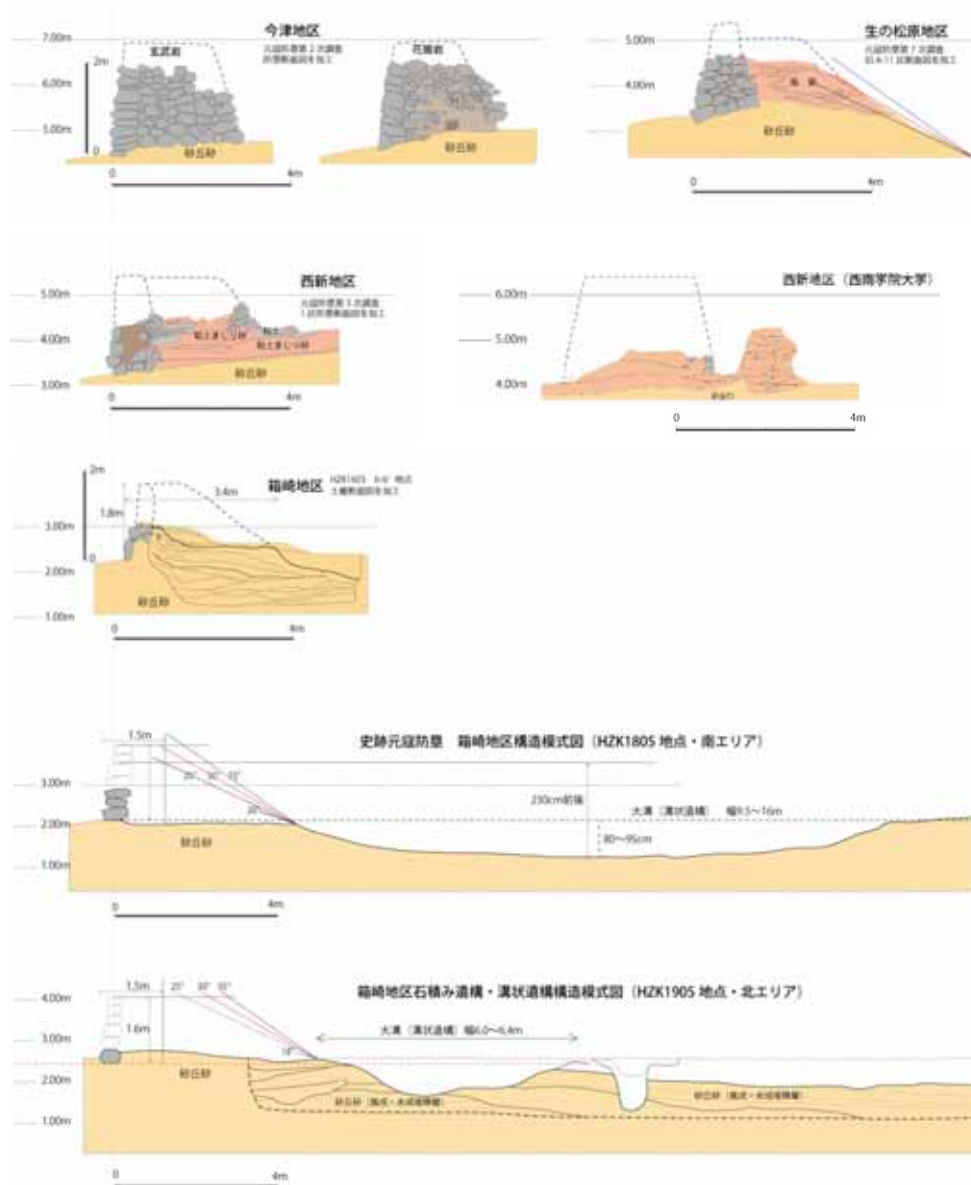


図 2-6 元寇防塁地点別構造比較図

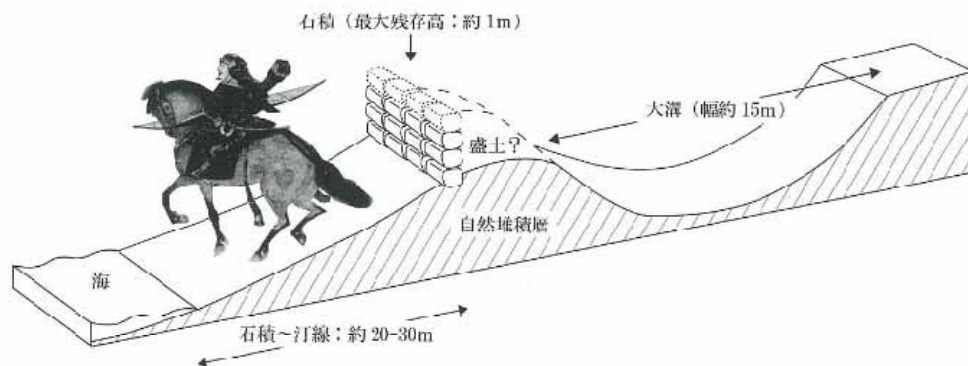


図 2-7 箱崎地区元寇防塁構造模式図 (九州大学埋蔵文化財調査室 2020 より)

参考文献

- 荒牧宏之編 2001『国史跡元寇防塁（生の松原地区）復元・修理報告書』
福岡市埋蔵文化財調査報告書第 694 集
- 伊藤慎二 2017「西南学院大学構内のもうひとつの元寇防塁遺構」
『西南大学国際文化論集』第 31 巻第 2 号
- 大塚紀宜編 2002『西新地区元寇防塁発掘調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 726 集
- 大塚紀宜編 2007『香椎地区遺跡確認調査報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 926 集
- 大塚紀宜 2013「元寇防塁と博多湾」『新修福岡市史特別編』福岡市
- 川上市太郎 1941「元寇防塁」『元寇史蹟（地之巻）』福岡県史跡名勝天然記念物調査報告書第 14 集
- 川添昭二 1971『註解元寇防塁編年資料』福岡市教育委員会
- 川添昭二 1977『蒙古襲来研究史論』雄山閣出版
- 川添昭二 2006「元寇防塁が語るもの」『市史研究ふくおか』創刊号 福岡市史編さん室
- 木下讃太郎 1915「元寇防塁の石」『元寇史蹟の新研究』史跡現地講演会
- 藏富士寛編 2019『元寇防塁 調査総括報告書』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1382 集
- 齊藤瑞穂編 2020『箱崎遺跡』九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 3
九州大学埋蔵文化財調査室報告第 4 集
- 佐藤一郎・井上繭子編 2002『博多 85』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 711 集
- 史跡現地講演会編 1915『元寇史蹟の新研究』丸善株式会社
- 島田寅次郎 1925「西新町（百道原）新発掘元寇防塁の横断面」『筑紫史談』第 34 集 筑紫史談会
- 竹谷水城 1921「多々良川以東に於ける元寇防塁の有無に就いて」『筑紫史談』第 24 集 筑紫史談会
- 竹谷水城 1922「多々良川以東元寇防塁有無に就いての補足」『筑紫史談』第 25 集 筑紫史談会
- 中山平次郎 1913『福岡付近の史蹟』九州帝国大学医科大学雑誌部
- 中山平次郎 1914「箱崎の石塁」『筑紫史談会講演会集第 1 輯』筑紫史談会
- 中山平次郎 1915 a「元寇当時の防塁と博多湾の地形変化」『元寇史蹟の新研究』史跡現地講演会
- 中山平次郎 1915 b「元寇役防塁址と博多湾岸の地形変化（上）」『歴史地理』第 25 巻第 3 号
日本歴史地理学会
- 中山平次郎 1925「博多湾の海岸線」『地球』3-1（中山平次郎 1984『古代乃博多』所収）
- 中山平次郎 1926・1927「古代の博多」『考古学雑誌』16-6～17-10
- 西園禮三・柳田純孝 2001『元寇と博多 写真で読む蒙古襲来』西日本新聞社
- 福岡市教育委員会編 1968『生の松原元寇防塁発掘調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 3 集
- 福岡市教育委員会編 1969『今津元寇防塁発掘調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 4 集
- 福岡市教育委員会編 1970『西新元寇防塁発掘調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 11 集
- 福岡市教育委員会編 1978『史跡元寇防塁保存管理計画策定報告書』
- 福岡市教育委員会編 1995「地藏松原元寇防塁」『福岡市埋蔵文化財年報』Vol. 8
- 福岡市教育委員会編 1998「元寇防塁第 6 次調査」『福岡市埋蔵文化財年報』Vol. 11
- 福岡市教育委員会編 2002「元寇防塁第 9 次調査」『福岡市埋蔵文化財年報』Vol. 15
- 福岡市教育委員会編 2016「元寇防塁第 11 次調査」『福岡市埋蔵文化財年報』Vol. 30
- 福岡市教育委員会編 2017「元寇防塁第 12 次調査」『福岡市埋蔵文化財年報』Vol. 31
- 福田正宏・森貴教編 2018『箱崎遺跡』九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 1
九州大学埋蔵文化財調査室報告第 1 集
- 福永将大編 2021『箱崎遺跡』九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 4
九州大学埋蔵文化財調査室報告第 5 集
- 福永将大編 2022『箱崎キャンパス地区元寇防塁調査総括報告書』九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 5**
九州大学埋蔵文化財調査室報告第 7 集
- 堀本一繁 2018「蒙古襲来と博多」『史跡で読む日本の歴史』6 吉川弘文館
- 三阪一徳・谷直子編 2019『箱崎遺跡』九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 2
九州大学埋蔵文化財調査室報告第 2 集
- 柳田純孝 1984「元寇防塁と博多湾の地形」『古代乃博多』九州大学出版会
- 柳田純孝 1988「元寇防塁と中世の海岸線」『よみがえる中世』1 平凡社